

## 『宗碩五百箇条』への成長

余 語 敏 男

## はじめに

『宗碩五百箇条』はやく小島吉雄氏が「新古今和歌集の歌が多数注釈せられてをる」と指摘され、近年も大村敦子氏が「西行・定家らの和歌約四〇首の注釈を行う」と述べられた。実際は『新古今集』歌八首（彰考館本は九首）、西行歌三首、定家歌一首である。

『俳諧大辞典』は本書を「連歌詞注釈書」として扱い、「……三百五十余項目の歌詞、去嫌・式目・故実等を、たまに宗砌以下玄清までの句を引用して注解したもの」と述べる。『俳文学大辞典』では本書を「連歌辞書」として扱い、「……約三二〇項目について語釈、連歌における分類・去嫌・付合などの式目を例歌や宗祇らの例句を引用しつつ注解する」と述べる。本書は注釈書か辞書か、何のための和歌注釈か、どのような「歌詞」を注解し、どのような「式目・故実等」を注解しているか等、本書の性格・内容はまだ明らかにされていない。書名は伝本により異なる。書名の相違は何を意味するか。本書は成立以来、どれほど利用されてきたか。いずれも未詳である。近年、本書の多数の箇条が『詞源略注』に引用されているという指摘がなされている。それが事実とすれば、本書が極めて重要な存在であったという証左になる。

小考は、まず伝本四種について箇条の排列を比較対照し、箇条数と排列の異同を明らかにする。次に、箇条本文の異同を調べる。この両面から四本の系統を考察する。箇条各項の内容は各方面にわたっているので、領域別の箇条数と排列とを確かめ、それによって本書の性格が何であったかを考察したい。

## 一 諸本の概要

本書の伝本は岩瀬文庫蔵『聞書連歌』、書陵部蔵『連歌不審詞聞書』、京都女子大学図書館蔵『宗碩聞書』、彰考館文庫蔵『宗碩五百箇条』の四本である。他に、日本大学付属図書館本があるが、現在所在が不明の由である。

岩瀬文庫本は縦一六・二糎、横二三・三糎の横本一冊。無地の白表紙は年を経て淡いクリーム色を帯びる。題簽はなく、表紙左上に「聞書連歌」と打ちつけ書きする。綴じ糸の左、上部にラベルを貼り、その下へ綴じ糸に添って「御室御本寄進 朗俊之」と打ちつけ書きする。冒頭にあそび一丁がある。その表は余白、裏の左端に朱印「仁和寺／菩提院」がある。第二丁に内題「聞書」があり、その下に朱の陰刻「柳原庫」と朱の陽刻「岩瀬文庫」がある。一面十八行書き。料紙は薄様で、虫損甚しく、全丁が裏打ち補修されている。

墨付き二十一丁。巻末に次の識語がある。

右條々月村齋聞書也努々不可他見者也

右一冊者自宗碩聞書不可他見者也

享祿二年初冬下五日

宗牧<sub>在</sub>

天正三年卯月二日書之

一校早

序跋、他の識語等はない。本文には読みがながある。麻(1ウ)、苧(3オ)、司(3ウ)、機・膚・本色(4オ)、七車(5ウ)、木(6オ)、梭を投(8ウ)、死鹿取・品鹿取(9オ)、量(11オ)。イ本校合等の書き入れがある。お、したつる(5ウ)とあるがイ本に相当する本は現存しない。やすめ字也(9ウ)のイ本には書陵部本が相当する。山かつらハ(13ウ)の「本」は書陵部本、京女大本(以下、略称)が相当する。彰考館本はこの項を欠脱する。宗祇(14ウ)のイ本には京女大本と彰考館本が相当する。末いそかれてぬ(14ウ)は本書の誤写の訂正。小倉山秋の哀や残らまし(20ウ)の「本」は書陵部本、彰考館本が相当する。京女大本はこの項を欠脱する。他の書き入れに、濁へし(1ウ)、種まくて(2オ)、副木(2ウ)、ありとも子細あるへし(13オ)、かけはなれぬる(源氏物語(17オ))、おほえよと(18オ)、鳴立澤の秋の夕暮(20オ)、夢になせとそいひて別し(20ウ)がある。その他の書き入れに「環云」五箇所がある。

書陵部本は縦二七・一糎、横二〇糎の大本一冊。薄ねずみ色紙表紙、紺色系で綴じる。袋綴じ。題簽はなく、表紙左上に「連歌不審詞聞書」と打ちつけ書きする。冒頭にあそび一丁がある。その表裏とも識語はない。全丁に虫損があり、全丁とも裏打ち補修されている。第二丁に内題が「聞書」とある。その上の余白に朱蔵書印があ

る。一面十二行書き。墨付き二十七丁。巻末にあそび一丁があるが、表裏とも余白である。

本文の表記は漢字片かな書きであるが、時には平がなの連綿がまじる。「あさなけと云ハ朝夕ト云心也(8ウ)と書き入れがある。

他の三本とも「朝夕と云心也」とある。「萩二小鳥(13ウ)と校合がある。岩瀬文庫本、京女大本は「萩に小鳥」、彰考館本は「花に小鳥」とある。「萩」のイ本は現存しない。他に校合、見せ消ちはない。読みがなもない。「あらハ逢瀬に(17オ)の項に「か様ニアルナヨ」を二度記すのは本書のみで、誤写と思われる。他の書き入れに「言云」八箇所がある。

第二丁表の「軒ちかき夜ルノ」項の前に小付箋(縦六・九糎・横〇・七糎)が付されている。付箋には鉛筆書きで「彰考館文コ、マテ」とある。彰考館本は「軒ちかき夜ルノ」項以下を欠脱しているのではない(後述)。付箋の注者は、彰考館本の箇条の排列が他の本と異なることに気付いていない。

京都女子大学図書館本は卷子本一卷。桐箱入り。箱蓋表に「法眼紹巴手蹟／宗碩聞書 一卷」とある。箱は縦三一・八糎、横八・八糎、深さ八・八糎。箱の内には短冊一枚、朱野巻紙一枚、書状一通が添えられている。

(一) 短冊(縦二四・三糎、横七・三糎)一枚。表に「一紹巴手蹟宗碩聞書／一卷／神戸市／諸井竹廬氏」とある。短冊中央の文字「碩聞書／一卷」の上に朱角印が捺してある。裏は余白。

(二) 朱野紙の巻紙一枚。「宗碩聞書連歌巻に就て」と題し、「此連歌卷子は筆者の氏名華押等記載なきも宗碩聞書紹巴筆と称せらる。装幀料紙すべて時代色あり珍籍として尊重すべし」と記す。以下、十箇条にわたって本巻の書誌(第一条から第七条)、人物略伝(第八

条に宗碩、第九条に紹巴、第十条に富田屋八郎右衛門を記す。第三条「料紙は」の条はすでに大村敦子氏が翻刻解説に引かれている。三、八、九条の他は左の通りである。

- 一 一 一 九寸二分
  - 二 長 二十九尺五寸
  - 四 箱書及巻の外題に書かれたる「月村齋宗碩聞書里村紹巴筆」の文字は共に富田屋八郎右衛門の筆蹟なり
  - 五 巻に添付の信書一通、里村御宗匠尊下村亀瑞として巻の由来を記述あり
  - 六 本文聞書は箇条書総て三百六十三項より成る連歌に関する聞書なり
  - 七 筆蹟は流布の短冊等に見る紹巴筆癖と異にせる点あるも晩年の書なるべく先年南天莊先生も一見して紹巴筆なるへしと言はれたり
  - 十 富田屋八郎右衛門は本名江田世恭と云ひ、大阪の人篤学博識にして読書を好み時人呼んで書淫となす 又鑑定に長じ其鑑る処のもの「富八極め」と称し世多く之に信頼す、寛政七年三月三日を以て歿せり
- 昭和四年十二月十日／浪華／小竹園主人／識（朱印）
- (三) 添状（巻紙一枚。天地一六・五糎、紙幅八六・三糎） 包み紙の表に「月村齋宗碩聞書／紹巴手跡也 箱入之添状也／但し今井、貸申候事」とある。書状巻頭に「里村御宗匠尊下 林亀瑞」とある。巻末に「七月廿八日」とあるが年記はない。
- 卷子本の表紙は無地濃紺色、紙高二八・二糎。巻き紐は切れて六糎が残っている。表紙左上に題簽（縦一一・九糎、横四・五糎）がある。題簽には「料帛天正八年古曆／月村齋宗碩聞書／全本／紹巴法

眼筆」とある。題簽の右肩に蔵書分類番号ラベルが付されている。表紙内側は金色紙、紙幅二〇・三糎。本文料紙は十五枚の暦日表と五枚の連歌懐紙を貼り継ぎ、巻軸用の別紙一枚を貼り加えて卷子本一卷とする。貼り継ぐ料紙一枚毎の紙幅は以下の通り。第一紙から順に記す。単位は糎。三九・〇、四六・〇、四五・八、四六・〇、四六・〇、四六・一、四六・一、四六・〇、四六・〇、四三・七、三七・六、四四・〇、四四・五、四四・三、一八・二（こ、までは暦日表）、四七・六、四七・三、四七・七、四七・七、四七・三（こ、までは連歌懐紙）、四三・八（巻軸用別紙）。巻軸木はない。全長九二〇・七糎。

第一紙に二一行、第一行に三〇字を書く。その文末四字は行末左脇に添えて記す。第一紙終わりから二行めは二九字で、やはり文末四字を行末左脇に添えて小さい文字で記す。第二紙は三二行、第三紙は三〇行を記す。全体に文字は小さく、禿筆（筆勢が感じられない）で、判読しにくい文字が少なくない。第十二紙の箇条番号「一」は横並びが動いている。第十六紙（連歌懐紙の裏）から第十九紙にかけての文字は第十五紙までの字体より少し大きめで、筆勢が感じられ、微妙に相違する。第二〇紙は別紙となり、『宗碩聞書』とは異なる歌語の注釈を記している。

大村氏の翻刻解説に「和歌注釈 二二八（一部切断）」とあるが切断箇所はどういう状況であろうか。第十九紙は左端に第342項の三行のみが見える。四行めは第二十紙が貼り重ねられて隠れて見えないが、四行めの文字の右端が僅かにのぞく。第十九紙の紙幅は四七・七糎ある。第十八紙の紙幅四七・七糎と同じである。切断されているのではなく、本来の第二十紙を失っている。別紙を第二十紙として貼り合わせている。

本書の書写者については、箱蓋表書きから添え物の短冊、本巻の題簽のいずれにも「法眼紹巴手蹟」「紹巴手蹟」「紹巴法眼筆」と記す。添え物の朱野巻紙には「紹巴筆と称せらるる」、信書包み紙の表には「紹巴手蹟也」と記す。浜千代清氏は「題簽の通り、紹巴の筆として間違いなからうと思われる。」と述べられた。<sup>〔注5〕</sup>「紹巴手蹟」として精査すべき貴重な伝本である。

彰考館本は縦二八・五糎、横二〇・五糎の大本一冊。表紙は薄茶色の紙表紙で、微細な雲母を散らしている。袋綴じ。表紙左上に白無地の題簽があり、「宗碩五百箇条」と墨書きする。表紙右上には蔵書票「巳拾九」がある。巻頭、巻末ともあそび紙はない。本文料紙は薄様、虫損が多いが未補修である。内題にも「宗碩五百箇条」とあり、その下方に瓢箪形の蔵書印がある。一面十二行書き。墨付三十六丁。最終丁の裏は余白。余白の左端に付箋があり、それには「不合遇」の説明三行が記されている。序・跋、識語等はない。

本書には見せ消ち、書き入れ、重ね書き、校合の跡等が甚だ多い。文字の左傍に「と」を付し、その文字の右傍に訂正文字を書き入れる所が一二七箇所ある。「と」を付すのみで、右傍に書き入れない所が四箇所ある。字間に「〇」を付し、その右傍に書き入れる所が三一箇所、「〇」は付さないで右傍に書き入れる所が三箇所ある。文字を消した上に重ね書きする所が三二箇所、重ね書きらしい所が四箇所ある。消した跡だけがあつて、その上に文字を記さない所が五箇所ある。イ本書き入れは一二二箇所ある。「本ノ」とする書き入れが三箇所、「本ノマ、」とする書き入れが一箇所ある。読みがなける所、書き損じや墨の汚れもある。文字の右傍に「〇」をつ

彰考館本第二六六箇条に、

(四)

一 <sup>不審本ノて</sup>かた事也はハなりと云詞なり  
とある。京女大本にこの項は「一なりと此詞かた事也…」とある。「なりと此詞」の五文字を欠脱している。彰考館本の書写者は五文字欠脱の本を写している。彰考館本第三一七箇条に、

一 <sup>た</sup>こふましきいさ<sup>あすい</sup>より後の思ひかな馴てかなしき別そひなは是<sup>こころい</sup>  
<sup>ヒ</sup>ハ堪忍すましき也定家歌也

とある。校合箇所は岩瀬文庫本・京女大本には「明日」「心」とあり、書陵部本には「あす」「心」とある。彰考館本は他の三本とは別の系統の一本に拠っている。彰考館本第一八七箇条には、

一 <sup>きこぬい</sup>こぬ人の情の程のあらハれてし<sup>さ</sup>ハし八月にかゝる<sup>まの</sup>うき雲

とある。校合箇所の本文「こぬ人」「情」「の」「れ」は他の三本と同じである。イ本に示す本文の伝本は知られない。彰考館本は他の三本とは別の系統の本を写し、さらに別の一本で校合していると見られる。イ本校合の他の五箇所を調べても、彰考館本が拠っている本の系統は未詳である。

## 二 書名

書名は四本それぞれに異なる。岩瀬文庫本は外題に「聞書連歌」とあり、内題は「聞書」である。書陵部本は外題に「連歌不審詞聞書」とあり、内題は「聞書」である。京女大本は外題に「月村齋宗碩聞書」とあつて、内題はない。三本に「聞書」の語が共通する。彰考館本は外題、内題ともに「宗碩五百箇条」とある。

「連歌不審詞聞書」という書名は第一箇条「思草ハ……」、第二箇条「月草と云ハ……」とあり、これら歌語の不審について聞書きした書という意味での命名とわかる。一方、「宗碩五百箇条」という

書名は、本書の書式が箇条書きであるから、その書式による命名とわかる。しかし、彰考館本は全部で三六〇箇条であり、一四〇箇条も足りない。なぜ「五百箇条」か、いつ「五百箇条」と命名されたか、が問題となる。そもそも、「箇条」の本義は貞永式目のように武家の法度に冠する名称である。連歌の分野では、同様の書名『連歌五百箇条』（卷子本一卷）が書陵部に所蔵される。この一卷には「於湯山三条西殿式目条々三色 明応三年正月日 夢庵」以下が見える。各条とも箇条書き形式である。伊地知鐵男氏は『拾螢抄』に「宗砌嫌物十八ヶ条（イ本十二ヶ条）」が見えること、宗伊には『連歌嫌物事』（三十五ヶ条、イ本三十六ヶ条）が存したこと、『無言抄』には「心の杉の植物に一句嫌と宗祇八十か条に書き」とあることを指摘されている。<sup>注6</sup>『連歌新式拾螢抄』を見ると「宗砌嫌物内ニハ……」「宗砌嫌物云……」等という叙述が五箇所以上ある。また、「宗砌嫌物能阿本ニ八十八ヶ条載之古本二十二条載之其外ハ大同小異也」ともある。『宗砌嫌物』は十二ヶ条本から八十八ヶ条本まであった、という。宗祇に『宗祇八十か条』があった（『無言抄』）が、宗牧には「宗祇ニ不審事五五箇条」がある。岩瀬文庫蔵『連歌新式追加并新式今案等』に付載されるもので、『宗碩五百箇条』と全く同じ形式である。『連歌新式拾螢抄』は扉に「法橋昌純作」とあり、巻末識語には「此一冊者予式目ノ下書也懇望附与……法橋昌純（花押）」とある。昌純が「法橋」に叙せられたのは正徳、享保の頃であろうか。『無言抄』の慶長頃から正徳、享保の昌純の時代にかけて、「（何）箇条」と称する式目書が伝来し、利用されていたことと思われる。

『宗碩五百箇条』という書名の付与は、本書を式目書として伝承する姿勢を示している。彰考館本の箇条数は四本の中で最も多い。箇条数を意識的に増やしている気配がある。この点については後述

する。

### 三 領域の認定

本書の巻頭は四本ともに「一 思草ハ……」「一 月草と云ハ……」（彰考館本のみ「月草とは……」）「一 しの薄と云ハ……」（岩瀬文庫本・京女大本。書陵部本・彰考館本は「しノ薄トハ」と初まる。「……ハ」「……と云ハ」の叙法は歌語説明の型として後統し、第一六四箇条（「水のみかたとハ……」岩瀬文庫本）に至る。しかし、第一六五箇条は「一 苗代とはかりハ非水辺植物……」、第一六六箇条は「藤なミ藤波と書り然共非水辺……」となり、叙法は式目の規定を記す表現に変化する。興味深いことに、彰考館本のみは「水のみはたとハ……」の項の次の箇条は「竹ちかく夜床ねハせし……」という和歌掲出の箇条に移る。彰考館本は以下の二七箇条は和歌掲出の箇条となる。書陵部本と京女大本は岩瀬文庫本と同様の排列である。つまり、歌語説明の箇条は巻頭から「水のみかたとハ」の箇条（書陵部本は第一六三箇条、京女大本は第一六九箇条）までで、「苗代とはかりハ」の箇条からは岩瀬文庫本、書陵部本、京女大本とも式目を説明する箇条である。この三本は、式目説明の箇条の後に和歌掲出・注釈の箇条が排列される。四本それぞれの、三領域の箇条排列と箇条数とは表(一)の通りである（後掲）。箇条の排列を比較することによって、次の四点が判明する。

- (一) 歌語条項の箇条数は岩瀬文庫本一六四項、書陵部本一六三項、京女大本一六九項、彰考館本一六七項で、四本間の差は小さい。
- (二) 式目条項の箇条数は岩瀬文庫本九六項、書陵部本一四五項、京女大本一五〇項、彰考館本一五三項で、岩瀬文庫本が特に少ない。
- (三) 和歌条項は岩瀬文庫本と書陵部本が各三六項で同数。京女大本は

二八項、巻末を欠失する為に少ない。彰考館本は四〇項である。  
 (四)彰考館本は排列が他の三本と異なる上に、全体の箇条数が最も多い。これは、独自条項を持つことと、箇条の数え方とによる。

四 歌語条項

四本の歌語条項の排列を比較すると、次の一〇箇所に違いが見られる。語形は断らないかぎり岩瀬文庫本による。

- (1) おきな草とハ ↓ 草クサとハ (岩・書・京。書・京の後項は「草薙」。  
 彰は逆順) (2) さき草 ↓ そか菊と云ハ (岩・書・京。彰は「そか菊とハ」の三項後に「さき草とハ」) (3) をたまきと云ハ ↓ とふさ  
 ハ (岩・書・京。彰は「おたまきとハ」の四項後に「とふさ」) (4) いやまと帯と云ハ ↓ 花たの帯と云ハ (岩・書・京。彰は逆順) (5) やまとしまねと云事 ↓ あさもよひと云事 (岩・書・京。彰は「あさもよひと云事」の二項後に「やまとしまねも」) (6) 夜わたる月と云は ↓ たくかのけふりと云は (京女大本の語形による。岩・書は欠脱。彰は逆順) (7) 谷の戸といふハ ↓ ちりかひくもれと云ハ (岩・書・京。彰は「谷の戸とハ」の一七項後に「ちりかひくもれと云ふハ」) (8) いへはとと云ハ ↓ めるめりなとハ (岩・書。京は欠脱。彰は逆順) (9) いさゝめと云ハ ↓ 目わたる鳥と云ハ (岩・書。書は前項を欠脱。彰は逆順) (10) をちかた人と云は ↓ いもかりと云ハ (岩・書・彰。京は逆順) 彰考館本は岩瀬文庫本と七箇所 (1)(2)(4)(5)(6)(8)(9) で逆順となり、二箇所 (3)(7) で並びの箇条が離れる。

歌語条項の中で一本以上が欠脱する箇条は一九項となる。その分布は表(二)の通りである(後掲)。この表によって、岩瀬文庫本と書陵部本とが一致し、京女大本と彰考館本とが一致することがわかる。箇条の見出し語(歌語)は先ず草の類がまとめられている。草類

には異名が目立つ。次に木の類がまとめられている。帯の類に進むと、歌語としては用例の稀な語が取りあげられていることがわかる。そこで、歌語条項の全部の歌語について、十代集に見えるかどうかを調べてみる。第六五箇条「山姫立田姫さほ姫」は三語として扱うと一六六語となる(岩瀬文庫本による)。その結果は、十代集に全く見えない語(五四語)、十代集に一例又は二例見える語(五九語)、十代集に三例以上見える語(五三語)となる。十代集に見えないのは次の各語である。(数字は岩瀬文庫本の箇条に付した通番、語形は同文庫本による。同本に不載の語は他本により、その通番と語形を示す)

- 4 かりふの薄 12 心の麻 13 色草 17 おきな草 18 草薙(書陵部本)  
 20 なくさ草 24 もてなや草 25 さき草 29 むらかしわ 36 をたまき 47 いやまと帯 49 いてのした帯 50 白木の帯 52 恩賜の御衣  
 55 心あひ 57 さほ風 58 いかほ風 59 山鳥のをつのはつお 62 くにす、64 かたしろ 66 ねちけ人 67 あけのそほに 70 ありのすさみ  
 72 催馬楽 75 みくしあけ 76 山まゆ 77 あや薙 80 あさもよひと  
 にお嶋ちかく 82 しら鳥の鳥羽 85 しらぬひのつくし 87 あま小舟はつせ 88 かくらくのはつせ 89 宇治橋渡 91 齋院のかしらおろして 94 いとむ 97 朝つくひ 100 名かう(書陵部本) 101 夜わたる月  
 105 かまかへり 106 なけの情 108 さほなくるま 109 まとり 110 むさ、ひ 118 雲こる 122 さか 130 いちくら 136 うれ葉 138 目わたる鳥  
 いさゝる 154 あさはか 156 ときつ風 159 九重の山 163 たつか弓

この中の四一語が『匠材集』所収語、五語が『無言抄』所収語、三語が『詞林三知抄』所収語と合致する。

「歌詞の注解」(伊地知氏)「語釈」(大村氏)と言われる歌語条項の説明には幾つかの意図が見える。第一箇条に、

思草<sup>1</sup>ハリんたう也秋也<sup>2</sup>龍膽と書也<sup>3</sup>りうたんの花と云也<sup>4</sup>たんの字<sup>5</sup>

濁へし

とある。1は「思草」がりんたうの異名であることを言い、2は季の規定を記し、3は漢字表記を示し、4はそのものの実体を、5は読み方を説明する。異名の説明には第一七箇条「おきな草とハ菊の異名也」もある。季の規定を記すのは実体の明瞭でない歌語があるからで、第一六箇条「もすの草くき」の説明の中に「草くきとありても鴟にひかれて秋也」とあるのはその例である。その歌語の類別規定を説明する条項も多い。第二一箇条に「事なし草 何事もなきやうの草也植物にあらず」とあるのはその例である。

歌語として用例の稀な語を掲出し、連歌用語とするための知識として、異名、季の規定、そのものの実体、式目規定等を説明することが歌語条項の意図であった。

## 五 式目条項

式目条項の数は箇条番号「一」と記す条項のまま数えると表(三)の

表(三) 式目条項の箇条数

独自	欠脱	計	括り	箇条	
0	52	102	6	96	岩瀬
0	4	152	7	145	書陵
0	4	153	3	150	京女
4	8	153	0	153	彰考

「箇条」の欄の数になる。が、彰考館本以外の三本は一箇条の中に別項を含める場合がある。これを「括り」と称し、括られる箇条数を「括り」の欄に示した。「欠脱」欄の数は、他の三本がすべて掲げるのにその伝本のみが欠脱する箇条数である。「独自」欄の数は、その伝本だけが持つ箇条数である。

箇条を括る、括らない、に四本の書写態度が見える。岩瀬文庫本に、

一 にとまりの事一句にていひつめたるハとまらぬ也 へ人くやと

しはしハいとふ山里に印孝是□人くやにて可有か へ心こそ空になりぬれ咲花に是わるし へなとか涙の袖にあまると云に草も木も葉にしたかへる露の世に宗祇 かやうにあ□にとまりハあるへし(14才)

とある。京女大本は「なとか涙の」の上にも箇条番号「一」を付して二箇条とする。彰考館本は「心こそ空に」の上にも、「なとか涙の」の上にも「一」を付して三箇条とする。「に」とまりの例句を二・三箇条と扱う京女大本・彰考館本は箇条の説く趣旨を考えていない。もしくは、意図的に箇条数を増やしている。書陵部本は一箇条としており、原態を留めていると認められる。「物をととむる句大事也」の一箇条(岩瀬文庫本・書陵部本)、「朝の露夕暮の雲」の一箇条(岩・書)も京女大本と彰考館本は二箇条とすること、右三例によっても岩瀬文庫本・書陵部本は原態を留めていること、京女大本・彰考館本は増補系の伝本であることが窺える。しかし、次の例が残る。

一 幾重雪ハラハん岩ねつもるらん此句云おほせすうつむらんにてハよし

一 逢坂や関の山風袖さえて此類也山風に袖さえてと云へしいひたえぬ也関の山越風さえてなといへは云おほせらるゝ事也是をす□の詞と云也(岩瀬文庫本)

「此類也」は前条の「云おほせす」と同類であることを指す。彰考館本はこの二箇条を一箇条として括るが他の三本は二箇条としている。彰考館本が原態を留めていると考えなければならぬ。

京女大本と彰考館本とは本文の上でも相通ずる点が多い。(1)野遊(書)―あそふ野(京・彰) (2)宗祇(岩・書)―宗碩(京・彰) (3)向後身ノユクエ(書)―行ゑ(京) ゆくゑ(彰) (4)はつせの山

とすまノ(書)―はつせのやます(京・彰) (5)鐘ノねワろし(書)―かねのねよろしからす(京・彰) (6)前句を取と云事(岩・書)―前句と云事(京・彰) (7)才違(書)―棲違(京・彰) (8)千種色(岩・書)―種草色々(京・彰)

(1)(7)(8)は語形、(2)は人名、(4)(5)は句形が一致し、(3)(6)は欠脱が一致する。「棲違」は『詞源略注』に、「シ、マ 棲違トカキタリ。ヤスマキタル心也。末摘花イクタヒカ君カシ、マニマケヌラン。」と見えるが、京女大本には「棲違やすらいたる心也源氏哥にあり汝等」とのみある。(彰考館本は「源氏の哥なり」となる他は同文。書陵部本は「才違」とあり、「汝等」を欠く。岩瀬文庫本にこの箇条はない)この語注を宣賢が引いた(参照した)とは考えられない。

京女大本と彰考館本の二本だけが共通して持つ二箇条がある。京女大本(数字は大村氏翻刻に付す通番)に、

248 ふりてふるきおもてをきらふへし

294 浮世に憂別の字なれとも心かよふ間二句嫌也

とある。「経・古」「浮・憂」という文字遣いの規定である。いずれも『連歌新式<sup>追加並</sup>新式今案等』に見えない。『無言抄』には、

古の字の嫌ひやうの事、古あと、古枝などの嫌、折を嫌なり。ふるきにいにしへ二句嫌なり

とある。「おもてをきらふ」と「折を嫌」とがどのように運用されていたかは未詳である。『無言抄』に、

うき世憂の字に二句嫌へし

とある。この規定は『宗碩五百箇条』の条文と全く一致する。天正から慶長初年に行われた『無言抄』に接近し、一致するこの二箇条の規定は、増補追加された箇条と考えられる。

式目条項は岩瀬文庫本に五二箇条が見えない。岩瀬文庫本の欠脱か、他三本の増補か、が問題となる。五二箇条の中には、連続する

八箇条が二度、連続する一三箇条が一度ある。この一三箇条は「比トマリ」から「五月雨ハ」までで、その終わり五箇条には「賦物事」「夢想連歌賦不書也」「夢想連歌ヲ惣而…」「夢想二下句ヲ…」「五月雨ハ…コレヲ大マハシト云也」がある(書陵部本による)。この一三箇条は京女大本・彰考館本とも整っている。書陵部本は一箇条を欠脱する。このまともまりを全て写し洩らしたとは考えられない。巻末識語には「一校早」と銘記している。書陵部本以下三本の増補と考えられる。

増補された五二箇条を『連歌新式<sup>追加並</sup>新式今案等』と照合して整理を試みる。(数字及び箇条本文は京女大本の翻刻による。同書が欠く場合は他の本による)

一 連歌新式と合致する箇条は次の一七箇条である。

〔一座三句物〕 182 紅葉とありて 208 都旅に一

〔一座四句物〕 228 関は名所に一 280 朝霜霜朝

〔可嫌打越物〕 187 木枯うへ物にあらず 231 見字事

245 すくなきにつれなきなど 246 今年今日など云

254 ころとまり 257 てにをはのなりと云に 260 字あまり

305 在明に在字

〔可分別物〕 188 あしかも植物にあらず

199 すそ野山類にあらず 216 春日にはるの日とも

250 遠きちかきは

〔句数〕 261 恋の句

二 連歌新式と対応する箇条は次の二七箇条である。

〔類・輪廻事〕 243 煙に塩やくなどのたくひ

〔類・可嫌打越物〕 202 み山へふかくなど

224 行身の行末ならば 225 雨さめ 226 色と云には



- 234 はつせのやます 247 かすかさたかのかの字  
 255 ぬとまり 256 ぬるぬれなど 259 事といふに  
 307 野山の色つく 333 うかる、と云ふに(彰考館本)  
 314 立といふ字

## 〔類・可分別物〕

- 180 夜を待月と云ハ 185 名草のかる、ハ 190 青葉は季なし  
 191 きぬくはり季なし 193 桜木冬木  
 194 野をわくるうへ物にあらす 196 ふかき野うへ物にあらす  
 221 くる、夜と云ハ 244 もにすむ虫ハ季なし  
 249 かねのねよろしからす 252 なりと此詞 290 棲違  
 314 ねちけ人は(彰考館本) 313 花のすかたなといへは  
 三 その他の箇条は次の八箇条である。

- 189 をく霜も 211 けふもや草の 236 うつ、もさそな  
 262 賦物事 263 夢想連歌にハ 264 夢想連歌を惣して 265 夢想に下句を  
 266 …大まハしと云也

連歌新式と合致する箇条として扱ったのは、箇条の見出しが合致するのであって、箇条に説く規定が合致するわけではない。

182 紅葉とありてハ其折に葉と云字有へからす惣て百韻に三四ある物をはまつは懐紙をさらふと可心得

「紅葉」と「百韻に三四ある物」が連歌新式の規定「一座三句物」と合致する。「葉」文字の禁止、懐紙を嫌うという規定は連歌新式に見えない。むしろ、『無言抄』に「紅葉三共に折を替也」とある規定と共通する。

208 都旅に一た、一なるへしいつれにも二あると云はわろし故郷同前この箇条は連歌新式の規定「都 只一名所に一旅に一」と合致する。「類」として扱った箇条は、幾らかでも連歌新式の規定と対応あ

るいは相当する面を探ってみたものである。

243 煙に塩やくなどのたくひ不可付

連歌新式「輪廻事」に「煙と云句に里と付て又柴焼」とある。「煙に塩やく」は「柴焼」と対応する。

その他の箇条として扱うのは、例句による式目の説明が四箇条(189 211 236 266)と、賦物、夢想連歌に関する説明四箇条である。句をあげて大まはしを説明した後に「口伝なり」と記す。夢想連歌の心得等は連歌新式に見えない。これらの箇条は新式今案以後の式目運用の実情を窺わせる。

## 六 和歌条項

岩瀬文庫本は歌語条項に二三首を引くが、式目条項には歌は見えない。式目条項の後につづく三六箇条はすべて和歌一首を掲げて、その歌に説明を加える。この三六箇条を和歌条項と呼ぶ。

彰考館本は独自の箇条排列である。四本に共通する二六首一連(彰考館本は一首増補して二七首となる)が歌語条項の直後に移動していること、他三本が巻末に排列する一〇首が八首と五首(三首増補)に分配されていることである(表一)。この改編がいつ行われたかが問題となるが、手が、りは見出せない。

彰考館本の増補と見たのは次の四首である。

一來ぬ人を松をの浦の夕なきにやくやもしをの身もこかれつ、  
 二つけの・に大山もるかしめ置しひむるハわか君のため  
 三旅人の袂涼しく成にけり関吹こゆるすまの秋風 行平

四秋風の関吹こゆる度ことにこゑ打そふるすまのうら浪 忠見

一は『新勅撰集』(八四九)一六首一連の中にあつて語注、歌の心の説明がある。二は出典未詳であるが『藻塩草』巻第三地儀部、野に、

つけの野の大山もりかおさめたるひむろのいまもとたえさりけりがある。上二句が一致するのみであるから、『藻塩草』は参看してない。三は『続古今集』六六、四は『新古今集』一五九。二・三・四には歌語、歌意についての注釈はなく、作者を説明するだけである。歌に注する態度が異なる。

和歌の注釈は何を意図しているであろうか。歌語「夜床ね」に「床と云字を濁也」と言い、「されはこそ」「さりとは」の用法を説明する。「此末のとまりふりたるやうにきこゆれとも」と結句にも言及する。「心の池」の詠み様を説明する。注釈のねらいは歌語にある。歌語条項との関連を考えなければならぬ。その一方、「下にふくミたる也」「惣而哥のおもても」と言い、表裏両面から一首の心をとらえる。「心なき身にも」の歌に「我身の心なきと心得るハわろし」と記すのは主客両面から一首の心をとらえる立場と見られる。「面白躰也」という評語も見える。歌の心の読みについても懇ろに説明している。

### 七 紹巴と『宗碩五百箇条』

岩瀬文庫本の巻末識語に「天正三年卯月二日書之／一校早」とあるが、その前年、天正二年六月十一日に紹巴は『宗碩五百箇条』を書写している。それは、木藤才蔵博士が嘱目された日本大学附属図書館本である。「紹巴年譜稿」によれば、天正二年六月一日、一日、紹巴は石山寺世尊院景恵における初何百韻に一座してゐる。六月十一日書写はこの一座と関係があるであろう。この日大図書館本は岩瀬文庫本校合の九ヶ月前の書写となる。もし、伝えられると

おり、京女大本が天正九年に近い時期の紹巴手蹟であれば、紹巴は二度この本を書写したことになる。歌語条項の中に『匠材集』所収の語が多数見えることを述べたが、これは、紹巴が『宗碩五百箇条』を書写したことに依る可能性がある。式目条項の増補にも紹巴の手が加わっているのではないか、という一つの視点が生まれる。

京女大本『宗碩聞書』は紹巴手蹟と伝えられる。その真偽の判定には、筆蹟とは別に、「料帛天正八年古曆」と、紙背の連歌懐紙とが基準になる。古曆は天正八年のものかどうか。卷子本は二〇枚の料紙を貼り継いでいるが、その第一五紙だけは紙幅一八・二糎の断簡である。第一紙から第一四紙までの紙幅は、第一一紙の三七・六糎以外はすべて四三・七糎以上ある。第一五紙の暦日は八月一日から八月十五日までを記し、第一四紙には八月十六日から九月廿三日までを記す。九月十六日の一行は第一四紙と第一五紙とを貼り継いだその合わせ目の上のせて書かれている。第一六紙は連歌懐紙である。懐紙に貼り継いだ断簡に八月一日から書き初めるのは作爲的である。さらに、第一四紙と第一三紙との貼り合わせ目の上に九月廿三日の一行が書かれ、第一二紙と第一一紙との貼り合わせ目の上に十二月八日の一行が書かれている。第一一紙と第一〇紙との貼り合わせ目の上には天正九年一月一日の一行が書かれている。

第一五紙から第一一紙までの五枚に八月一日から十二月卅日までを左から右へ一日の洩れなく記し、第一〇紙から第一紙までの十枚に天正九年の一年間の全日を記す。貼り合わせ目の上に記される所が九箇所ある。これは一年五箇月という中途な曆の写しである。いつ写されたかが問題となる。「料帛古曆天正八・九年」をもって紹巴書写の基準とすることができるであろうか。「里村御宗匠」宛ての林龜瑞の信書には「先達而御尊申上置候紹巴様御手蹟之よし／連歌聞書一卷／外題管

書対 富田屋八郎右衛門様／右富田屋先生より往□□ひ置候」とある。本巻の伝来はすべて富田屋に負うている。

第一紙から第一五紙までの書体を見ると、「な」「あ」「心」に筆癖が強い。これらの書体は手鑑の短冊類の紹巴筆蹟とは異なる。色紙「名とり河」の連筆には似る所を感じさせる。書体一字一字の特徴、第一六紙以後の書風等に慎重な調査が必要である。

### おわりに

『宗碩五百箇条』四本の箇条排列を比較することによって、三領域の箇条数を確かめることができた。歌語条項の箇条数は三領域の中で最も多い。本書の原態はこの領域の書、つまり歌語集であったことを窺わせる。それも通常の歌語ではなく、用例の稀な歌語を集めているので、書名は「不審詞」（書陵部本）とも命名される。問題は、特殊な語を連歌語として用いようとする時代背景である。連歌用語の拡大の方向を示している点に本書の役割があるのではないか。宗碩・宗牧の時代におけるこれら歌語の利用を、連歌作品について確かめることが今後の課題である。また、本書の条文が『詞源略注』に引用されたかどうか。両書の関係とともに、宣賢の周辺を確かめることも今後の課題となる。

岩瀬文庫本の式目条項の数は際立って少ない。この領域の箇条を増補し、式目書としての性格を強め、「五百箇条」と命名したことが考えられる。宗碩の名を冠したのは、「自宗碩聞書」とあることに加えて、宗碩を宗匠と崇める心に基づくのであろう。箇条数はその成長過程を考える手がかりを与える。

肖柏以後の式目規定は肖柏流・紹芳流等と呼ばれて行われていたようである。『連歌新式拾螢抄』に、「カツラハ惣而草也…宗碩ト冷泉為広トカラカイ有シ也」と記し、カツラをめぐる両者の見解の相違

を伝えている。同書は、宗牧・宗養・紹巴の説を伝えている。式目条項に説く規定を調査し、『連歌新式追加並新式今案等』との距離を計測し、一座運営の実状を明らかにしなければならない。『宗碩五百箇条』は式目書として形成され、命名された一書と考えられる。

注1 小島吉雄著『新古今和歌集の研究』（昭和十九年五月発行 星野書店）三九頁。『俳文学大辞典』（平成七年十月発行 角川書店）「宗碩五百箇条」の項（大村敦子氏執筆）

注2 『俳諧大辞典』（昭和三十二年七月発行 明治書院）「連歌不審詞聞書」の項（伊地知鐵男氏執筆）。前掲書の大村氏執筆。

注3 小川幸三『宗碩五百箇条』と『詞源略注』（熊本短大論集）第三七巻第一号 昭和六十一年七月発行 熊本短期大学

注4 木藤才藏著『連歌史論考下 増補改訂版』（平成五年五月発行 明治書院）一〇二頁。木藤博士より、日本大学文学部にて学会開催時、展観されたのをガラス越しに見られた旨の御教示を頂いた。

注5 浜千代清『月村齋宗碩聞書』（俳文学研究）第十三号 平成二年三月発行 京都俳文学研究会 五頁。

注6 伊地知鐵男『連歌新式歴史考』（伊地知鐵男著作集Ⅱ（連歌・連歌史）（一九九六年十一月発行 汲古書院）六七頁、六八頁、七〇頁、七二頁）

注7 大取一馬編『詞源略注』（昭和五十九年七月発行 古典文庫）二三頁。

注8 『私家集大成 第七巻中世V』（昭和五十一年十二月発行 明治書院）五四頁。

注9 奥田勲『紹巴年譜稿（二）』（宇都宮大学教育学部紀要）第十八号第一号 昭和四十三年十二月発行

注10 『古筆手鑑大成第七巻あけぼの（下）』（梅沢記念館蔵）（昭和六十一年八月発行 角川書店）に所収。

注11 岩瀬文庫蔵『連歌新式追加並新式今案等』に付載する「聞書少々」の中に、「永日過てハ遅日あるへからす何も永日の事なれば二二一有へし是ハ肖柏流也」とある。

表(一) 箇条排列と箇条数

96	水のみかたとハ 苗代とはかりハ	164		岩瀬文庫本 — 思草ハ
	水のみかたとハ 苗代ト斗ハ	163		書陵部本 — 思草ハ
	水のみはたとハ 苗代と斗ハ	169	霜の後	京女大本 — 思草ハ
27	水のみはたとハ 竹ちかく	167	ねちけ人	彰考館文庫本 おもひ草ハ
	来ぬ人を			
	苗代とはかりハ			

表(二) 歌語条項の欠脱箇条

7	忘草ハ雑也	○	岩瀬
20	なくさミ草と云ハなくさミの事	○	書陵
20	こと草平生の佗言など(京)	×	京女
31	玉栢と云ハ栢をほめて云也	○	彰考
41	そくと云ハすハそれはなと	○	
54	鳩ふくと云鹿を取人	○	
60	かはちめと云ハ河内女也(京)	×	
79	やまとしまと云ふハ(彰)	×	
81	にゐ嶋ちかく	○	
101	たくかのけふりと云ハ(京)	×	
111	ころもかりかね(京)	×	
126	いなせと云ハいなはいや(京)	×	
127	いへはゑと云ハ	○	
134	らしと云詞らんと云(京)	×	
137	いさゝめと云ハ	○	
140	おもひくまと云ハ	○	
141	くまなきと云ハ	○	
151	老らく老の事也	○	
161	のミと云事はに限ると	○	
	欠脱箇条(計)	7	

(備考) 数字は箇条に付した通番。箇条本文は岩瀬文庫本による。同本が欠脱するときは他本による。  
○は有を、×は欠脱を表す。

	10	忘れぬや		26	逢坂や 竹ちかく		145	
	10	忘れぬや		26	相坂や 立ト字ニ 軒ちかき		150	
	2	わすれぬや		26	あふ坂や 立といふ字 竹近く		122	
	24	立と云ふ字	5	秋風の かすむる	7	ねちけ人 あちさゐの	8	字はねの事 わすれぬや

(備考)  
 1 細線は歌語条項、太線は式目条項、点線は和歌条項を表す。和歌条項は二十  
 六首一連とその他とを分けて示した。数字は箇条数である。  
 2 語句は各本の箇条の頭語又は歌の初五である。  
 3 太字は独自歌(京・彰)と重出(彰)である。

(付記)

- 一 京都女子大学図書館、岩瀬文庫、宮内庁書陵部、彰考館文庫(訪書順)には貴重な蔵書の閲覧をお許しいただきました。感謝の意を表します。
- 二 『宗碩聞書』(請求番号KN九一一・二 S0六二)は京都女子大学所蔵の貴重書である。
- 三 小考は、平成九年度名古屋女子大学特別研究費の助成の成果である。